

ニジェール支所便り

2019年9月号

【編集長】小畑支所長 【編集担当】佐々木企画調査員

Tel: (227) 2073 5569 Fax: (227) 2073 2985 E-mail: ni_oso_rep@jica.go.jp

★ニジェール支所便りが JICA ニジェール支所の HP でも閲覧できるようになりました！懐かしのバックナンバーにもここからアクセスできます!! ⇒ <https://www.jica.go.jp/niger/office/others/newsletter/index.html>

今月のトピック



- 支所長からのひとこと
- 支所からのひとこと ～ゆく人、くる人～
- 新コーナー:ニジェール隊員 OV からの便り
- プロジェクト・専門家等の活動の進捗状況紹介
～みんなの学校:住民参加を通じた教育開発プロジェクト・フェーズ 2～
～PASVA:農業普及システム改善プロジェクト～
- ニジェールにおける活動紹介
～ニジェールでゴミを集める日本人 第 21 話 -人口増加と若年婚のジレンマ～
- 編集後記にかえて ～ようこそ、ニジェール・ラバー！～

支所長からのひとこと

雨期も後半に入り、やや雨が多くなったかなと思った矢先、ニジェール河が警戒水位(6.2m)を超え、8月30日にはニアメ州知事から注意が呼びかけられました。

アガデスでは水害で 2500 世帯以上に被害、死亡者も出ている模様です。

ニアメ市内の川岸では沿道のすぐ下まで水がきており、2012 年以来とのこと。付近に住んでいる住民には緊張した様子もなく子供たちは元気に遊んでいましたが、この先大丈夫か心配です。



最近、ニジェールパラリンピック連盟が入るセイニ・クンチェスタジアムを訪問する機会がありました。赤十字国際委員会からのお誘いです。連盟は 1999 年創立、800 人を超えるパラアスリートが登録。

51歳の車いすのウスマン会長が案内してくれました。速くてついて歩くのが大変。パラバスケット、ハンドバイク、短距離、円盤投げ。ニジェールのような気候も設備・機材も何もかも厳しい環境の中、障がい者が夢を追い続けていくのになんほど強い意志が必要なことか。会長が選手たちを自分の子供のように激励する姿に元気をもらいました。

Made in Niger のハンドバイク！ 目指せ “Tokyo バンバン(2020)！”

(それにしてもなぜトラックにオートバイがいるんだろう？)



<追伸>

中川さん、5年間お疲れ様でした。またいつか札幌でうまいものを食べましょう！

内藤さん、お手紙ありがとうございました（新コーナーご参照）。「ニジェールの方々と日本人ボランティアが砂にまみれ、汗を流しながら同じ時間が過ごせる日がくることを願っています」。本当にそう思います！

支所からのひとこと ～ゆく人、くる人～

着任のご挨拶

8月20日にニジェール支所に着任しました、企画調査員(援助調整)の大出です。

ニジェールは2010-11年にみんなの学校の業務調整専門家勤務以来、8年ぶりの赴任です。ニアメの近年の発展は目覚ましく、到着時の空港のすばらしさには目を見張るほどでした。飛行機から通路で直結という便利さだけでなく、全館冷房、ガラス張りの空港、ここはどこ？と思いました。各所でトイレチェックを怠らない、トイレフリークの10歳の娘マリカは早速空港のトイレに駆け込み、「ものすごくきれいで、電気が自動で点く」と仰天。



ニアメ市内にも AU 総会開催時に宿舎となった新しい豪邸が立ち並び、国際会議場、ワガでもおなじみのプラピアホテルももうすぐ完成です。ラディソンホテルの最上階のバーからはニジェール川の景色が素晴らしく、夜ともなれば光の数は少ないものの、セーヌ川の夜景にも勝るとも劣りません(誇張あり)。

前職はワガドゥグ日本大使館の開発協力担当書記官でした。ワガと比べて生活はどう？とよく聞かれますが、夜間外出禁止ではないので窮屈感はなく、物資の状況もワガと比較しても同等で、快適に生活できそうだと思っています。ビール党として寂しいのは国産ビールが突如消えたことでしょうか。

仕事については、5年勤務した重鎮中川さんの後釜になるプレッシャーが重く乗りかかっていますが、経験豊富な小畑支所長はじめ佐々木企画調査員、そして優秀な現地スタッフに支えられ、何とかやっていけそうだと思っています。また、親事務所のブルキナファソ事務所にも着任早々多大なご支援をいただいております。

娯楽の少ないニアメ生活のため、今回の赴任では、任天堂スイッチおよび4つのソフトをゲットしてまいりました。ネット環境も整え、動画視聴もばっちり。中川家から引き継いだビリヤード、卓球、エアホッケーも大活躍の予感です。皆様、ニアメにご出張の際は、QG レストラン隣の大出家へ是非お立ち寄りください。



離任にあたって

現在、5年間を振り返る時間も無いほど、引継ぎに精を出している中川です。余裕をもって始めた帰国準備だったのですが、後任者のパソコン環境の設定や IT 関連の各種変更届など、この終盤になって煽られているところです。

改めまして、在任中は大変お世話になり、心温まるご支援も賜り、ありがとうございました。

2014年8月、パリで家族(家内と娘)と合流し、内陸国となるニジェールへの赴任なので“魚が食えないぞ”と思いつつ、ホテルで魚メニューに喉下を鳴らしながら最後の晩餐に挑んでいました。そして、ニアメに着くや否や、例のごとくタラップから降りると、ムーとする熱気が骨まで浸み込む暑さの中、『ここが任地なんだ』、と言い聞かせる自分がそこにいました。

あれから5年、任国から退避することもなく細々とした生活を無事に終えることが出来てホットするとともに、これもまた皆様方の支援のお蔭だと深甚たる思いが込み上げてきます。

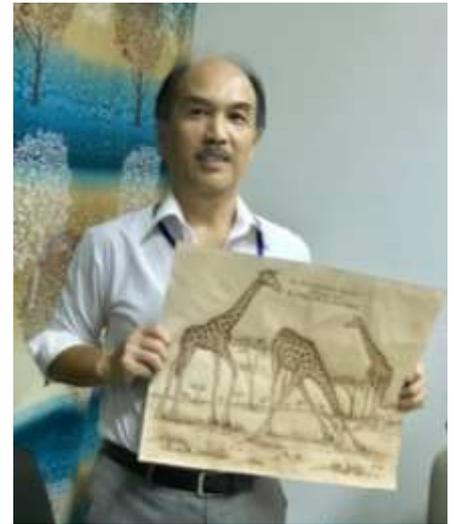
暑さ酷暑がとりえのニジェール、私たちは、いつ焦がされてしまうのかと恐怖の4月と5月を乗り切ること、5回が過ぎました。こんなに長居する予定ではなかったのですが、仕事が次から次へと降ってきたこと、治安が次から次へと悪くなってきたこと、極度の乾燥肌に次から次へと慣れたことなど、任国の生活様式・環境を武器に乗り越えることが出来ました。そして、色々な事が、長くも短くもありました。狭き籠の中の鳥であるニアメでの生活は、良くも悪くも不思議なほど、人との出会いがありました。一期一会で当てはまらない、なんで、ここニアメで会うの？と疑いたくなる出会い、不思議な¥(縁)です。これはきっと JICA にしかできないパワースポットのような空間、不思議な世界がここニジェールでした。そのニアメのビジョンについて、5年前の着任時に目にする物、風景、おまけに雑感が、ここにきて大きく変化に淀み、一挙に盛り上げてくれました。新空港や高層ホテル etc…、ニジェールを知る人ぞ知る、驚きあるニアメの変貌ぶりは、何といてもこの5年間で一番うれしいことです。いつもは OOO 白書で世界最下位がニジェールと大きくレッテルを張られ、良くて下から2番3番と最下位グループから身動きできなかったニジェール、これを脱皮したかのような、虚像的な発展を誇るのがニジェールです。私もここにきてニジェールファンになったような。。しかしながら、目に見えない現実も覆い被るニジェールでは、火種となる資源問題や治安問題が傀儡政権に如し、国民の考えに反する国家形成など、やはり貧困と富豪との格差拡大が命取りとなる気がします。

何喰わぬ顔をしてノサバツている裸の王様は誰なのか、理解する必要もあるかと思います。まあ～、難しい空想のお話はさておき、中川の5年を振り返ると、今一つ心残りがあります。それは、キリンです。何といてもニアメの70kmくらい南下したところに、立派な野生のキリンが群れを成して生息しているその場所に行けなかったこと、“キリンが見たかった”中川です。

かつてのニジェールのように、どこにでも行ける、護衛なしで秘境ツアーにも行けるそんなニジェールが来る事を願って去りたいと思います。みなさん、ごきげんよう！！

追伸

キリンお話のおまけとして、ニジェールのビールラベルに麒麟が描かれたコンジュクチュールと言う銘柄ビールを製造している唯一のビール会社を Castel 社が買収に乗り出したとか、よって、そのキリンラベルも姿を消してしまいました。同社の若社長が、瓶ビールではなく缶ビール戦略で失敗したとか、時は去って行く今日この頃、あの可愛いキリンラベルも懐かしい限りです。



中川さんの無念を晴らすべく、支所員からキリンの絵(素材:牛革)が送られました。いつか生キリンを拝みに来てください！



新コーナー ㊚ ニジェール隊員 OV からの便り ㊚

7月に実施された課題別研修「アフリカ地域・地域保健担当官のための保健行政」に参加したアルズマ・カドリさんが無事に研修を終えてニジェールに戻り、嬉しいお土産を携えて支所を訪問してくれました。元ニジェール協力隊員の内田真美さんからの心温まるお便りです（日本の懐かしい飴ちゃんも皆で美味しく頂きました㊚ありがとうございました！）。



カドリさんが支所を訪問した時の様子

小畑支所長

はじめまして。21-3 次隊でビルニンコンニの県病院へ感染症対策の隊員として派遣されていました内田(旧姓 日達)と申します。現在長崎大学で博士課程の学生をしております。研修でカドリさんが来日され、お会いできた事がとても嬉しく、お手紙を書かせていただきました。

カドリさんが来日中、ちょうど元ニジェール隊員も遊びに来ていたので、夕飯を自宅で一緒に食べる事ができました。ニジェールでの優しい、楽しい時間が戻ったようでとても幸せでした。ニジェールでの経験はとても貴重で今でもよく思い出します。なぜだか、ニジェール隊員は、ニジェールの虜になっていて、何年たってもニジェールに思いを寄せています。色々な事情でなかなか隊員派遣の再開は難しいと思いますが、またニジェールの方々日本人ボランティアが砂にまみれ、汗を流しながら同じ時が過ぎせる日が来ることを願っています。



カドリさんは、積極的に行動していて、日本語のあいさつや、お手伝いを率先して行うなど、出会う日本人の方も驚かされていました。なかなか日本の医療事情とニジェールは大きな差があり、研修の内容全てがニジェールに応用できるものではないと思います。しかし、日本でも様々な厳しい状況を乗り越え、感染症を撲滅した経験等、生かせるものを生かして、多くのニジェールの方々が健康となるよう頑張ってもらえると信じています。また私自身も何ができるのかという事を常に考えていたいと思っています。

私事ですが、博士課程への進学へのモチベーションは、またニジェールに関わっていきたい、少しでも多くの人に健康でいてほしいという想いです。まだまだ道のりは長いですが、ニジェールの方々と一緒に汗を流せる日を夢見て頑張ります。

暑いニジェールでのお仕事、お体に気をつけてなされてください。事務所のスタッフの方々にもよろしくお伝えください。突然のお手紙、乱筆乱文にて失礼しました。

内田真美

★このコーナーでは、ニジェール OV の皆さんのお便りをお待ちしております！赴任当時の思い出や、エピソードなど写真と共にお寄せください！「かつてのカウンターパートは今どこで何をしてるんだろう？」といった疑問にも、できる範囲でお答えいたします（インシャアッラー）。

プロジェクト・専門家等の活動の進捗状況紹介

■ ■ みんなの学校：住民参加を通じた教育開発プロジェクト・フェーズ 2 ■ ■ ■

『みんなの学校：住民参加による教育開発プロジェクトフェーズ 2』では、初等教育分野と中等教育分野、二つの分野にて活動しています。初等教育分野においては、住民支援の校外学習に効果的なツールを導入することですべての児童の“読み書き”と“計算”の基礎学力改善を目指す『質のミニмумパッケージ』の開発と普及に取り組み、中等教育分野においては、アクセス、格差解消、教育の質の改善など、様々な教育開発課題の改善に貢献する“機能する”学校運営委員会 (COGES)モデルの全国普及を進めています。

「初等教育分野」では、今年度、101校の1年生から6年生約13000名の児童を対象に、児童の能動的な習熟度別学習法(Teaching at the Right Level: TaRL)と算数ドリルを組み合わせた「質のミニмумパッケージ」読み書き・算数活動を、3か月半にわたり実施しました。その活動内容や成果を他州関係者に広め、今後、教育省と共に、より多くの児童が質のミニмумパッケージの裨益を得られるよう協議するため、『質のミニмумパッケージモデル経験共有セミナー』を行いました。また、今回のセミナーでは、「質のミニмумパッケージ」活動の基盤である“機能する学校運営委員会”および“学校運営委員会連合”の今年度の活動結果の評価も同時に行いました。その結果、全国20,000ある初等学校運営委員会の9割以上が機能的に活動を計画、実施していることが確認されました。いずれの学校運営委員会も年間平均5活動以上を実施し、そのうちの7割が児童の学習改善を目指す補習や夜間学習を行い、年間200時間近くもの学習時間増加に貢献しています。

中等においてはまさに現在、“機能する学校運営委員会”モデルの普及に取り組んでいますが、初等においては、“機能する学校運営委員会”および“連合”モデルの普及からすでに10年以上が経過しています。それにもかかわらず、9割以上の学校運営委員会が毎年計画的に活動を実施し、毎年全国で5億円以上の資金を動員し、全国児童の40%を収容するにあたる2万にも及ぶ仮設教室を建設し、補習や夜間学習を通じた児童の学習支援に継続的に取り組む状況からは、まさに教育への住民参加と学校運営委員会が、ニジェールの全国各地のコミュニティにしっかりと浸透していることがわかります。しかもその情報が、限られたモニタリングや行政サポートの中、確実に中央にまで上がってくるネットワークがあるという点は、他国と比べても非常に稀有な状況です。このコミュニティの力と学校運営委員会のネットワークこそ、ニジェールの厳しい環境の中で、子どもたちの教育を前進させる“おおいなる力”となると考えられます。プロジェクトでは、その“力”を最大限に生かすようサポートし、より効果的な「質のミニмумパッケージ」モデルの拡大と普及を通して、ニジェールの子どもの学力向上へと繋げていけるよう引き続き取り組んでいきます。

(EPT 専門家 影山晃子)



「質のミニмумパッケージ経験共有セミナー」での活動のデモンストレーション（算数活動）様子



写真上：「質のミニмумパッケージ経験共有セミナー」での活動のデモンストレーション（読み書き活動）様子



写真 1：グループメンバーの紹介



写真 2：フィールドセッションの様子

予想はしていましたが、首都ニアメでも低いニジェールの識字率。21 名~32 名のメンバーの内、フランス語の識字者は 3~8 名（平均 5 名）とかなり厳しい状況です。来年、他州への展開を考えると、、、。マスタートレーナー候補生と話し合い、急遽、普及員と参加型ベースライン調査についての補完ワークショップを実施することにしました。



写真 3：グループメンバーの紹介



写真 4：CP s による参加型学習手法の説明

改訂の一例を紹介すると、参加型ベースライン調査の質問票の回答で「はい」か「いいえ」どっちかチェックしてね。は無理だろう。「はい」なら何か書いてね、「いいえ」なら書かないでね。と変更したのですが、これも難しいだろうな〜と一同頭を抱えながら、ひとまずやってみることになりました。

【改定前】

【改定後】

	はい	いいえ	→	はいいいえ
質問 1 XXXXXXXXXX				

21 問あるフランス語の質問項目をザルマ語に訳して、村人に分かるように説明してみるという演習をしたのですが、なんと 4 時間もかかってしまい、現場では複数回に分けて少しずつやることになりました。

少しずつではありますが、ニジェール人のペースでニジェールに合った普及手法になるように、現場の反応を見ながら改訂を重ねていきたいと思えます。

【文責：PASVA 専門家 小川奈穂子】

支所便り7月号(2016)から不定期でお届けしている、京都大学アフリカ地域研究資料センター・大山修一准教授の～ニジェールでゴミを集める日本人～シリーズ第21話。今回は、人口増加の背景にある若年結婚の現状について執筆頂きました。



結婚式の披露宴で上映される映画大会。中央に座る男性が新郎。電灯がないので、ほんとうは真っ暗。

2019年6月に国連が発表した人口統計では、ニジェールにおける人口の自然増加率(2015-2020年)は3.79%で、この数字は世界202の国・地域のなかでもっとも高くなっています。ニジェールの人口は20年で2倍になる驚異的なスピードで増えています。わたしがニジェールで調査を開始し始めた2000年には1133万人だった人口が、2020年には2421万人になると予想されています。ひとりの女性が一生涯に産む子供の数、合計特殊出生数(2010-15年)は7.6です。わたしの調査村でも、多くの女性が8~9人の子供を出産しており、この合計特殊出生数の高さを裏付けています。

World Development Indicators 2017年版のデータによると、15~19才の若年女性の20.1%が子供を出産していると言います。UNICEFは、ニジェールでは4人に1人の女性が15才までに結婚し、4人のうち3人が18才までに結婚していると推測しています(Lalaina and Islamane 2019)。一般に教育の普及と女性の出産には関係があるといわれています。男女あわせて、初等教育の修了する割合は69%と、アフリカ諸国のなかで低く、ニジェールでは教育を受ける女性の割合が低いこと、初産年齢の低さ、そして、女性が一生涯に産む子供の多さと関係しているといえます。一般に言われる原則がニジェールでは、そのまま当てはまるのです。



どの世帯も、子たくさん。家系図をつくると、女性たちは2年おきに子供を出産しています。



大家族の世帯では息子の妻たちが皿をともし、食事をとります。

ニジェールでは人口が急速に増加しつづける一方で、残念ながら、食料事情は改善することなく、悪化する傾向にあります。食料事情は雨の降り方や市場動向などにも影響を受け、年によって変動しますが、World Development Indicators 2017年版のデータによると、5才未満乳幼児の栄養失調は43%となっています。2012年の5才未満の低体重の比率は、男の子で42.1%、女の子で37.5%です。ニジェールでは2005年に240万人が食料不足を経験し、2012年には人口の約60%に相当する550万人が飢餓に直面しました。毎年のように、ニジェールには食料援助が続けられています。



婚出する女性の家財道具



女性たちが新婦の家財道具を運んでいきます。

ハウサの農村では、女性は14~18才、男性は20~25才に結婚します。男女ともに結婚することは重要だと考えられており、とくに独身男はトウズル (*tuzuru*) と呼ばれ、良くないとされます。男性は若くして結婚することで、生きていく知識 (*ilimi*) を身につけ、妻子を養育するという自覚を身につけます。家族が困らないように、妻のために一生懸命に働き、現金を得たり、食料を獲得したりする。それがハウサの男なのだと、男性たちは強調します。

男性は20才をすぎると、婚資(*sadaki*)を稼ぐため、都市への出稼ぎに精を出します。村での婚資の相場は20~30万フラン(4~5万円)であり、この金額は結婚相手の女の子の家柄によって変動します。また、男性は女性の両親に、娘との結婚を申し込むとき、婚約のためのお金 (*kyota*)、5~6万フランを支払います。その後、新婦 (*amariya*) 側より婚資の金額が提示されます。この金額は近年、上昇する傾向にあり、新婦の両親の経済力や家柄によって異なります。新婦側の家が裕福であれば、婚資の金額は上昇する傾向にあります。

新婦側の両親は夫側から受け取った婚資から、娘の新生活のために家財道具を買いそろえ、新郎側の家に嫁がせます。新郎は娘の父親から、現金以外に、オスのウシやヒツジを付け加えるよう要求されたり、衣類や調理器具、寝具などを追加で買いそろえることもあります。ただし、農村では、これらの購入に必要な資金すべてを若者が持ち合わせていることは珍しく、父親の支援をあおぎます。家畜を売るだけでなく、土地を担保に借金をすることもあり、父親にとって息子の結婚は悩ましい問題です。

農村では、若者夫婦は父親の世帯のもとで兄弟とともに暮らし、独立して生計を立てることはありません。家の敷地を準備するのは大変だし、家屋を新築する必要もあります。手元に家畜もないし、万が一のときに販売し、食料を購入することもできません。そして、村には、そもそも、生活に必要な農地の余裕がないのです。しかし、こうした大家族での暮らしは、干ばつどきや不慮のときにでも、父親の庇護や兄弟からの協力を受けて生活することができるのです。

農村で若夫婦が親から独立できるのは、男性が出稼ぎで成功し、多額の現金を持ち帰ってくるか、村で農業外収入を得て、自分の農地を購入できるようになったとき、あるいは、父が年老いて、農地を相続できるようになったとき、そして、息子が14才ころになって出稼ぎに出るようになり、生計を助けてくれるようになったときに限られます。

これらの選択肢のなかで、人口増加が急速なニジェールで、もっとも手っ取り早く、確実な方策は、子供、とくに未婚の息子の稼ぎをあてにすることです。手に職がなければ、出稼ぎによる男性の現金収入は安定することはないし、ハウサ社会では決まった相続方法がなく、農地の相続は兄弟との議論、ときに激しい争議によって決まるという不安定さがあるのです。

父親が息子の結婚に支援しなければ、結婚の時期は遅くなるのですが、娘をもつ親は婚資を入手できることもあって、早くに娘を結婚させようとします。この傾向は貧しい世帯に顕著です。若い男女の結婚には、生活に必要な手段や収入、土地、財産のいずれも欠如しています。生活力のない夫婦にとって現在、そして将来の生活を成り立たせるためには子供が重要になるのですが、その子供たちの半数ちかくが栄養失調だという過酷な現実、やりきれなさや将来を見通すことのできない恐ろしさを感じるのです。



村の子供たちは実によく働きます。子供は親を手伝い、日常生活では欠かせない存在です。



2月の食事風景。青・壮年男性の多くは都市へ出稼ぎに行き、女性が家と子どもを守ります。女性は木の実を集め、子供たちの夕食としています。

参考文献

Lalaina Fatratra Andriamasinoro and Islamane Abdou Soumaila (2019) Ending child marriage in Niger. UNICEF website, <https://www.unicef.org/niger/stories/ending-child-marriage-niger>

首都で事務所と自宅を往復する毎日を送っていると、人口の8割が暮らす農村の生活に思いをはせることはできても、それを肌で感じるとは難しく、こうした記述を読む度にいたたまれない気持ちになります。これまでは、首都ですら変化に乏しいニジェールでしたが、それがこの1年足らずで、急ピッチで目覚ましい発展を遂げているのを目の当たりにすると、それに伴って農村の暮らしもよくなってきているのではないかと、という淡い期待を抱いてしまいます。

大山先生の今回の記事は、私がかつて10年以上前に暮らした農村の当時の現状と何ら変わりありません。人口が以前よりも増えた分、もしかしたら暮らし向きはむしろ悪くなっているのではないかと、思わざるを得ません。子どもの誕生も、そして子どもの死も神(アッラー)の思召しであるため、それについての議論自体が難しく、「家族計画」という考え方は到底受け入れられないことは自明の理でした。子どもの誕生を、村を上げて祝福する一方で、幼くして亡くなる子どもも後を絶たず、ただそれを受け入れるしかない悲しく、虚ろな表情の母親の顔が今も脳裏から離れません。

宗教、教育、社会問題が複雑に絡み合い、今も増え続ける人口。そのはざまにいくつもの命が常に危険に晒されていることをより深刻に受け止める必要があると思います(Y.S)。



編集後記にかえて ～ようこそ、ニジェール・ラバー！～

今月号から始まった新コーナー「ニジェール隊員OVからの便り」、皆さま楽しんで頂けたでしょうか？隊員OVといえば、今回執筆頂いたPASVAのつかさ、こと小川奈穂子専門家もそのお一人です。様々なかたちでニジェール・ラバーの皆さんがニジェールを懐かしみ、思いを寄せ、そして戻って来て下さることを、我がことのように嬉しく感じております。そんな折も折、長年(約4年半)このニジェールで苦楽を共にしてきた中川企画調査員がニジェールの地を去りました。中川さんは任期中、ニアメから一歩も外に出

ることなく、日本の国土の約 4 倍というニジェールの地図をただただ恨めしく眺めるだけに終わってしまいました。ご本人も上述のとおり、ニアメから目と鼻の先の野生キリンの聖地クーレに行くことを切望しておられましたがそれも叶いませんでした。そんな中川さんたちの希望で、最近ニアメにできたばかりのホテル、Raddison Blu(ラディソン・ブル)の最上階にて、中川さんご家族の送別会をささやかながら行いました(在留邦人全員集合で 10 名...)。目の前に何も遮るものはなく、眼下に広がるニジェール川の美しさに皆が言葉を失いました。そして驚くべくことにメニューには **SUSHI** の文字が！景色の美しさに酔いしれながら、期待と不安を抱いて注文して出てきたそれにも、言葉を失いました(涙)。ただ繰り返しになりますが、景色は素晴らしかったです(写真下をご堪能ください)。

さよなら中川さん、そしてニジェール・ラバーの会へようこそ！

そしてもう一人のニジェール・ラバー、大出さん！ニジェールへようこそ！！



ニアメの街中にそびえ立つホテル



ニジェール川が一望できる最上階からの眺め



「ここはどこ？」と一瞬疑いたくなる夜の景色

(企画調査員 佐々木夕子)